
茶室の裏側はこうなっていたっス

岩戸 勇太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茶室の裏側はこうなっていたっス

【Nコード】

N3273S

【作者名】

岩戸 勇太

【あらすじ】

あのととき、話の裏側はこうなっていたのだ。

オオルリは目を覚ます。

左手に見えるのは朝日を浴びて真っ白に輝く障子である。畳の床の上に布団を敷き、浴衣のようにゆったりとした着物を着ている体を起こした。

重いまぶたを少しずつ上げていくと、好奇心旺盛な顔立ちの、まん丸の目が開いていく。

黒い瞳の彼女は、黒く長い髪を触り、ごわごわになっているのを見ると、枕元に置いてある櫛を取って髪を整え始めた。髪を乱したまま寝室を出て、一美の母親の前に行くと、厳しく怒られてしまう。

乱れた布団と浴衣を直し、部屋から出て行くと、最初に向かったのは台所であった。

そこにいた中年の女性は、オオルリの姿を見ると、オオルリの前に正座をして座った。

オオルリも正座をして、三つ指をつけてその女性に向けて頭を下げる。

「おはようございます。一花様^{いちか}」

この一花は、一美の母親である。

このオオルリも戦いの参加者である。

この家に置く代わりに、オオルリは昔から伝わる礼儀作法を仕込まれているのだ。

オオルリにいたっては、この細かい作法にすぐに順応をして、まるで、三百年前の武士の時代の出来事のように思える、家のルールに沿った生活をしている。

切れ長の目をした、一美と比べてもキツイ印象のある一美の母の一花は、頭を下げたままのオオルリに言う。

「頭を上げなさい」

そう言うと、オオルリは頭を上げ、背筋を伸ばして座った。

「庭の掃除をしておいて。それが終わったら朝食にします」

「かしこまりました」

そう言つて、また三つ指をついて頭を下げるオオルリ。

一花が立ち上がり、台所に戻つていくのを確認すると、頭を上げて庭の掃除に行った。

サンダルを履いて、冬の朝の空気を体に感じながら竹箒を降っているオオルリの姿が、一美の家の庭にあった。

鯉を飼っている池があり、今は使っていないししおどしに、石で作った灯籠など、立派な日本庭園の中、落ち葉をかき集めているところに、声がかかった。

「なんでオオルリさんはあんな事ができるん？ あたしにや、あんな拷問耐え切れんのに」

家の縁側を雑巾がけしていた青い髪の少女が言った。好奇心旺盛そうなまん丸の目をしたオオルリほどではないが、パツチリと開かれた緑色の澄んだ目をしている。

オオルリのように寝巻きに使っていた着物の上にジャケットを羽織っている。

今やつている雑巾がけを、おっくうそうにして柱にもたれかかっている姿だ。

「こつこつ事を怠つてはいけないっす。普段から気を引き締めておけば、知らぬ間に修練になつているものっすよ」

「優等生さんの言葉は身にしみるわあ」

その少女。サナミはまったく身に染みていないのが分かる態度だ、さらに深く柱に体重を預け、唇を尖らせた。

サナミも参加者だ。王の座を狙って日々戦いに身をおいている。

「あゝ。もちつと、ユルイ人に負ければよかつたわあ」

「私では不満っすか？」

頭を横に振つて深くため息を吐く事で返したサナミ。

道場の方から掛け声が聞こえてきた。この朝早くだというのに、一美は朝の稽古をしているのだ。

戦いには関係のない一美もあれだけががんばっているのだというのに、だらけきったサナミの態度を見ると、情けなく感じてくる。

「まったく……終わるまで朝食にありつけないっすよ」

掃除を続けるオオルリ。背中にサナミが雑巾がけを再開する音を聞きながら、これから先の事を不安に考える。

タオルで顔を拭きながらやってきた一美。ここは、畳敷きの部屋で百人以上の人間が集まれるような広い部屋になっている。

まるで、殿様などが座る場所のようにして、部屋の向こう側には一段高くなったスペースに、剥製や、木彫りの彫刻などが飾られていた。

その広すぎる部屋の中心にポツンと存在している感じでオオルリや一花などの姿がある。、四つの台を並べ、一人の前に一つの台があり、台の上に並んでいる豪華な日本食。

オオルリは問題ないのだが、サナミが朝食の事を見る目は、食い入るようで、口の端からよだれが今にも出てきそうな様子だった。

その前に座って、一美がやってくるのを待っていた三人は一美が自分の席に座るのを見ると、手を合わせた。

「それでは、いただきます」

一花の言葉から、全員がおごそかに食事を始めた。

「すまないな。みんな待たせてしまって。もう少し早く稽古をあがれば良かったな」

一美が言う。それに答えたオオルリ

「そんな事、気にする事ないっす。稽古は気が済むまでやるべきっす」

「だけどな……」

サナミが何かを言いかけていたのだが、オオルリはそれを睨んで止めた。

何かを言いたげであったサナミであるが、諦めたらしく、新しく魚の身を口の中に放り込む。

「一美。前に聞いた他の参加者の話なんすが……名前は分かったスか？」

一美が会ったというシエールの話だ。

白い髪に、赤い瞳。明らかにこの世界の人間ではないと分かる風貌である彼女は、一目見れば、他の参加者であると分かる。

黒髪に黒い瞳であれば、そうそうバレる事はない。

オオルリは、この世界の人間に扮して、相手の事を探るのも可能であろうと考えている。

「シエール……それにリーシアっていうらしい」

「あの二人かん？」

「結局タツグになるんスね」

オオルリとサナミは、それぞれの感想を口にする。

あの二人は、参加者達の中では有名だ。仲たがいをしていたという話を聞いていたものの、今はまた一緒に行動をしているのだ。

オオルリはそれを聞くと考える。

他の参加者たちは、どのような戦いを行っているのだろうか？

仲間集めは上手くいっているのだろうか？

自分の唯一の仲間であるサナミには、どうにもやる気や真面目さが見られない。早く新しく戦いをして仲間を増やしていかなばならないと、オオルリは考えているところであった。

「今度、家に呼んでみようか？」

「そうしてくれるっスか？」

一美の言葉は、オオルリにとっては願ってもいないことであった。相手の事を遠巻きに見るのではなく、直に見ることが出来る。今の状況が不安で、気持ちがいやっているオオルリに、ひとまず目標になるものが見つかるかもしれない。

オオルリは、一美が呼んでくれるという、シエールとリーシアの事を心待ちにする事になる。

一美は、この前の事を思い出した。

休みの日に雑踏の中を二人で歩くシエールと当一がいた。

「今日のはぐれるなよ」

シエールに向けて当一が念押しをして言う。

「わかったわよ……」

嫌々、しょうがなし。そういった感じに言うのだが、別に嫌がっていないのは遠目にも分かる。

すぐ隣にシエールが立ち、身を寄せるような距離になっていた。

シエールは、さりげなく当一の手をとった。

当一の腕を自分の背中に回し、手を自分の肩に乗せたのだ。

「どうしたんだ？」

当一は、シエールの行動の意味のまったく分かっていない感じで見聞く。

『当一……ああいうところが嫌なんだ……』

女の子が自分から手を取ったというのに、まったく反応がない。

どんなにアプローチをかけても、まったくそれと気づかないのだ。

シエールも、それにはイライラしているようだ。

「別に……あんたが離れるなって言ったんでしょー！」

「手をつなぐのがダメだって言うのに、何で肩を組むのはいいんだよ……」

「私は、人に利き手を預けないの。もしもの事があったら、すばやく動けないじゃない」

「お前はゴルゴか……？」

二人は、仲むつまじい様子で、町の中を歩いていった。

それを見たときは、一美は不思議な感じだった。当一のずっと隣にいたのが自分であった。

だが、その位置をほかの女の子に取られ、今まで何度も挑戦しても自分には無理だった、肩を組む事も成功している。

なんだか、悔しかったのだ。

胸のモヤモヤをなんとかしたい。それを考えると、つついっしエールに一泡を吹かせる事を考えてしまう。

それで結論として出たのが、シエール達にいきなり茶室で茶道をやらせることだ。

オオルリは、ほかの参加者達の様子を見るためと言って、参加をしたがっていた。

茶室で先に待たせておいて、後で紹介をする手はずになっている。今の一美は、着物を着て、もうすぐやってくる当一とシエール達を待っている常態だった。

着物に着替えてスタンバイをしているものの、胸のモヤモヤが大きくなってくるのを感じて、どうもソワソワしてしまう。

一美は、胸の前で握りこぶしを作りながらこれからやってくるシエール達を待つ。

この家に来客のチャイムが鳴った。当一達がやってきたのだ。

オオルリは、打ち合わせたとおりに茶室で座って待っていた。座りながらも、心を落ち着けていく。

一美と話し合った事はこうだ。

シエール達の様子を見たい。自分とサナミは上手に関係が作れていないと思う。他の参加者が、今どのような気持ちでいるのか？ どのような仲間がいて、どのような心構えでいるのか？

この戦いは、参加をしてみると、手探りの部分が多い。

周囲はどのような努力をしているのかわからず、努力の成果を成績表として廊下に張り出される事なんて絶対はない。

顔を合わせる機会などまったくなくはないはずの相手と、突然出会って戦いを始める。

前情報の無い得体の知れない相手と、いつ出会うか分からない対策の立てようがなければ、警戒のしようもない。

暗闇で雲を掴む事を強要されているような気分。

他の者を見る事でそれが少しでも晴れれば良いと思っている。

運がいいことに、オオルリの髪の色と目の色は黒いため、この世界の人間であると、偽装をするのは簡単だ。

相手は、有名なシエールとリーシアなのだという。

彼女らは有名だが、自分との面識は無い。特にボ口を出さなければバレる事はないだろう。

茶室の前に、人が歩いてくる音が聞こえ、オオルリは身構える。

最初に入ってきた白い髪に赤い瞳の女の子がシエールなのだろう。

不振にならないように注意をしながら、オオルリはシエールの顔を自分の目に焼き付けた。

もしかしたら、これからどこかで戦う事があるかも知れない相手だ。

敬意を持ち、礼儀正しく、正々堂々を戦う。その気持ちを、伝わ

らないと分かりつつもこめる。

自分が偵察まがいの卑怯な事をしているからこそ、深く気持ちをこめるべきだ。

そう考えながら、オオルリは言った。

「はじめまして、私はオオルリと申します」

シエールが入り口の敷居に足を置いた。

一花から厳しく躡けられているオオルリは、思わず「あっ………」と声が出そうになった。

だがその前に一美が言う。

「シエールさん敷居に足を置かないでください」

まるで、一花のような冷たい声で、一美が言った。

穏やかではない様子の一美に、オオルリはゾクリと背中に悪寒を感じた。

シエールは意味が分かっていない様子で答える。

「え………？」

「敷居を踏むのは親の顔を踏むようなものですよ。くれぐれも注意をなさってくださいね」

「はい……ごめんなさい………」

周囲が、気まずくて重い空気になっていくように、オオルリには感じられた。

「なんスか……？ なんなんスか………」

心の中で思う。

続いて、長い紫色の髪を垂らして、切れ長の目をした女の子が入ってくる。

「あれがリーシア………」

リーシアの顔も頭に叩きこむ。

そして、一美の友人であり、思い人であるという当一の姿も見る。そして、黒髪をした少女が入って来た。

「なんスか……？ なんなんスか………」

ラタ・ヴェンターである。オオルリはラタの事を見る。

彼女は、騎士の家計に生まれてきた女の子だ。昔から力があり、思いよろいを着込んで戦っていた。

彼女自身にはシエールと多少の面識はあったようであり、シエールとリーシアの『事件』の事だつて、彼女の口から聞いたのだ。

親が仲がよく、あう機会も多かった。

もちろんの事、ラタは自分の事を覚えているだろう。これでは、自分が参加者である事がバレしてしまう。

そこに、当一が言い出した。

「その子は誰なんだ？」

一美に言わせてしまつては本当の名前を言つてしまう。すかさず、オオルリは深く頭を下げて言つた。

「はい、私の名前はスズと申します」

苦し紛れで言つた偽名。

とつさに出た事だ、これで騙せるとは思えない。三つ指を付いた姿勢のまま、オオルリはこれからどうしようかを考えた。

シエールが言い出してくる。

「ちよつと待ちなさい！ あなた、最初は別の名前じゃなかった？」

「私の名前は生まれた瞬間から今に至るまでスズでございます。世界の始まりから、世界の終わりまで、スズ以外の何物でもなく、スズ以外にはなりえません」

「何なの？ その無茶苦茶な否定は！ どれだけあなたは自分はずだつて事を主張したいのよ！」

シエールがそう言うが一美がピタリと言つてそれを止めた。

「シエールさん。茶室の中で騒がないでください」

「う……う……」

とりあえず、この場はなんとかあった。一美が言つた事で命拾いをしたのだ。

『いちみんが上手くやってくれたね。感謝しい』

そこにいきなり声が聞こえた。

『これは、わたしの術の一つ、『糸声』なんよ』

オオルリの首元には細い針が刺さっていた。それから、見えないくらい細い糸が伸び、それを伝って声を相手に伝えているのだ。

『なんか考えてみい。あたしに伝わるからオオルリは考える。』

『あのラタって子は私の知り合いなんすよ』

それから、サナミと思念で会話を始めた。ラタにはれないようにして、この場を乗り切るにはどうしたらいいだろうか？ そう聞いてみる。

状況を説明すると、サナミは言い出す。

『ほー。つまり、このあたしに助けを求めてるって事やね？』

『何スか？ その言い方は……』

何か含みがあるような言い方で言ったサナミ。

『時間を稼ぐことだけ考えとき』

サナミはあれからそう言った。サナミはラタに睡眠薬を打ち込んだのだという。極細の針なので、刺された事にも気づかないような代物だ。

ただ、睡眠薬がきき始めるまで時間がかかる。それまで、時間を稼ぐ必要があるというのだ。

『それまで、普通にしていればいいだけっス』

前にいる当一を向きながら座るオオルリ。横目でラタの様子を確認した。

『めつちや、見てるっス……』

やはり、昔からの幼馴染を騙せるものではないようだ。自分がオオルリではないかと疑っているのが心の底から分かった。

『いちみんなも糸を通してあるかな。なんかあったら助けてもらえるんよ』

サナミが言う。そういう事ならば、一美と意思の疎通を図り、思ったおりに動いてもらう事もできるかもしれないのだ。

『一美につないでほしいっス』

『オーケー、ちょい待つて』

サナミとの通信が切れた。これは、三人以上で一緒に意思の疎通ができるような代物ではないようだ。

一人と交信をとるためには、もう一人と交信を絶たねばならない。不便な面もあるのだ。

少し待つと、サナミの通信が戻ってきた。

『なんか、会話にならん』シエル、なんかやれ。シエル、なんかやれ』ってしか考えとらんよ』

『恨み節！ 一美、少し冷静になってくれっス！ 暗黒面に落ちかけているじゃないスか！』

『オーケー。伝えてくるな』

『あ……ちょっと待つっス』

だが、オオルリの最後の交信はサナミには伝わっていなかったようだ。少ししてから、交信が戻ってきた。

『また、やっぱり会話にならんね。』シユコー……シユコー……』つていう空気の音みたいなものしか聞こえてこん』

『暗黒面にもう落ちていっス！ 戻ってくるっス一美！』

オオルリの目に、目の前にいる当一がじゃべりはじめるのが聞こえる。

シエルと一美の見えない戦いに気づいているようで、シエルと一美の様子を伺いながら言った。

『そっいえば母さんが渡したものは一体何なんだ？』

それを聞き、シエルが包みを開けると中から出てきた着物。

『この席にふさわしいお召し物ですねぜひお召しかえください』

一美が言った。そして、サナミの交信が入ってくる

『よし！ シエル達に着物の着付けなんて、わかる訳がない！』
つて一美が考えたよ』

『報告はいらなっス！ 一美の裏に潜む暗黒面はそってしておいてほしいっス！』

本当にいらなっ報告であると、オオルリは思った。

それから、一美が屋敷の部屋の一つを貸すという話をして、シエル達は一美の先導で外に歩いていった。

屋敷の奥まったところには、機械室がある。

北側の部屋で、屋敷の西と東で見て真ん中の位置にあるこの部屋は日当たりが悪い。

ここは、いくつかのテレビがあり、その中に写る映像を、一美とサナミとオオルリで見っていた。

「これは覗きっスよ……」

「ちよつと中の様子を確認するだけじゃないか」

「なら、正面から中に入ればいいんじゃないっスか？」

一美の家には監視カメラが取り付けられている。それを使って、中で着替えをしているシエル達の事を覗いていた。

別にやましい想いがあるわけではない。

「あいつらが困っているところを見計らって、さっそうと『お困りですか？ もしよろしければ私がお手伝いをしましょうか』などと言いに行こうと考えているだけだ」

一美は、口元を緩ませながら言った。

一美の頭の中には困っている所を助けに行くカツコイイ自分の姿が想像されているに違いない。

本当に、一美は考えている事がすぐに顔に出る。

映像を見ていると、最初に着替えを終えたのはリーシアだった。

着物を着付ける事ができず、四苦八苦しているシエルに声をかけていたが、シエルが突っぱね続けているので、諦めて次はノエリアに教えだした。

それを終えると、部屋を出て行く。

続いて、自分の着替えを終えたノエリアは、ラタの所に行った。

ラタが結ぼうとしている帯を持ち、ラタに両手を上げさせる。

だが、すぐにラタは顔を真っ赤にして、驚いて体を丸めてしまった。

「何？　これはどこを触ったん？　見えなかったわ」
サナミが言う。

「ところで、こいつって録画はできるん？」

「録画をして、どうするつもりっスか！」

サナミが言い出した言葉を聞き、オオルリは聞く。

「そりゃ、いい目の保養にさせてもらっんよ」

『この映像が目の保養……？』

サナミにそんな趣味があるのだろうか？

オオルリは、意外と腹が真っ黒な一美に続き、仲間の本当の姿を知りたくもないのに知ってしまった気分になる。

オオルリが横目で見ると、サナミはキラキラした目で、映像を食い入るようにして鑑賞していた。

それから、ドタバタと、ラタとノエリアが暴れながら着替えをしていく。ラタは、着付けが終わると逃げるようにして部屋を出て行った。

それからノエリアも出て行き、部屋に残ったのはシエール一人になった。

これで、一美にとって都合のいい条件がそろった。

「そろそろ行ってくるか」

口元をニヤリとさせる一美。

おもいつきり顔で『してやったり』と考えているのを表現しながら、オオルリと一緒に部屋を出ていった。

「当一さんが入ってきたな」

一人で部屋に戻ったサナミが言う。

当一が手を出すのを拒むようにして身を引くシエール。それでも、当一はシエールの事を掴み、背中を向けさせる。

帯の結び方は当一も知っていた。昔は一美も、当一に結んでもらっていたものだ。自分は結び方を覚えているというのに、当一にやってもらっていたのだ。

当一に帯を結んでほしいと甘えるのは、昔の一美にとっては当たり前の事だった。当一にそれをやってもらうのがとても嬉しかったのだ。

今さら、当一に頼むのは恥ずかしい。

今、シエールが自分にとってかわってその立ち位置にいる。自分の居場所をとられたような疎外感を感じ、自分の特権であったものが奪われた悔しさも感じる。

さらに、当一はシエールに正面を向かせた。

当一は、襟が乱れているのを見つけると無造作に直す。

それで、シエールが嫌がって当一の手を払いのけようとしている

映像が映った。

「一美……大丈夫なんか？」

奥歯を噛んで明らかに苦々しい表情をしている一美が、別のカメラに写っている。

自分が望んでも手に入らないものを、あっさりと手に入れているシエール。

そして、それを迷惑がる姿を見るのがとてつもなく我慢ができないようだ。

「こりゃ、まずいな……」

サナミが唸る。

カメラに映る一美の姿は、レンズ越しでも恐怖を覚えるほどに、恐ろしい色をしていたのだ。

それから、全員で茶室に戻って座りなおす。

オオルリは、正直この場所から逃げたい。

狭く作られている茶室の中で、一美とシエールのプレッシャーが充満しているのだ。息がつまりそう。そして、背筋が凍りそうだ。

そして、相変わらずラタは自分の事を見ている。ばれているのか？ ばれていないのか？

彼女は昔から、自分の考えを表に出さない所がある。

それが怖い。

「スズさ……スズさん……」

さつきから、声をかけられているのだが、それがまったくオオルリには頭に入っていないかった。

ふと、こう言われてしまう

「オオルリさん？」

そこで、さつきから声をかけられていたのに気づき、驚いたオオルリは答えを返した。

「はい、何でしょうか？」

「やっぱ、スズってというのは偽名ですか！」

オオルリはラタにはれないように、スズという偽名を使ったのを、その瞬間に思い出した。大きな間違いをやらかしてしまった。

「いや……違うんだ……」

それにフォローを入れるために一美が言い出す。

「茶の席では茶の席専用の名前が必要なんだ小説家のペンネームみたいにな」

一美が言う。

「はじめて知ったぞそんな話！」

当一が言った。

「当一は私から見ればまだ中級者だ。そんな事を教えられる段階じゃないな」

「あれ？ 本当なのか？ 俺が知らなかっただけなの？」

「もちろんだ」

自信満々の様子で言う一美。

だが、オオルリが当一の事を見るに、まったく信じている様子ではなく、かなり白い目をしていた。

そして、シエールがニヤリと笑った。

シエールは知り合いに、変なあだ名を付ける事を趣味をしているようだ。隣にいるリーシアにも、パンダのような名前を付けたりしているという事である。

今でも、ラタが自分の事をじつ……と窺っている。

『そういえば、いつ薬は利きはじめるんスか？』

オオルリはそうサナミに聞く。

『きき方には個人差があるんよ。もしかしたら、ラタちゃんには効かないかもしれない』

『そんな、どうしろと……？』

これ以上はどうしようもないんじゃないだろうか？ オオルリは、茶をたてながらラタが自分の事を言い出さない事を願った。

「そして、スズさんの名前は『名前の分からないセニョール』でい

「いかしら？」

さっきの変なあだ名の話の火の粉が、いきなり自分に降りかかってきた。オオルリは瞬間的に反応をしようとする。

「いいわけがないっす！ セニョールって何スか！」

思わず、普段の調子で返答をしてしまった。それに気づいた当一に指摘をされる。

「スズさん、あんた一瞬地が見えたな。くっス！ って言うキャラだったのか」

『これはどうするっスか……』

なんとか足掻く。どうしても自分の事は隠さねばならない……敵同士がこんなに近くに住んでいるという事がわかって、ご近所付き合いをするような、妙な関係になるのは、オオルリは絶対に嫌だ。

それに、学校での和美と当一の関係もある。

自分達が敵同士であるのが分かれば、二人の関係もきまわずなくなってしまうのではないだろうか？

「う……そんな事あるわけないじゃけんですよ」

オオルリは思いつくままに口調を変えて話した。

「広島弁の、くじゃけん。のつもりか？ 明らかに使い方がおかしいぞー！」

当一は言ってくる。そんな事は分かっているだが本当の事も言えないのだ。オオルリはとりあえず、また口調を変えてみる。

「そんな事ないっっちゃ！ うちの広島生まれの広島育ちだっっちゃ！」

「エセ仙台弁をしゃべりながら広島生まれを公言するな！」

これもダメのようだ……ならば別の言い方で言ってみよう。頭が整理されていないながらも、オオルリは必死に考える。

『そうだ……名古屋弁なんてどうスかね……？』

そう考えたところにシエールが言い出した。

「では、スズさんの名前は『名前が分からなければ、生まれも分からないムツシュ』でいきましょうか」

「いいわけがないと言っているんだがや！ 何で変な名前しか付け

ようとなないんだがや!」

そこに、横で聞いていたリーシアがくっついてかかってきた。

「私はランランよ! 人間扱いされているだけマシだと思いなさい!」

『何をいきなり出てくるんスカ……ウザいっす……』

正直、今はそれどころではない。シエルや当一の相手で手一杯だというのに、そんな事まで気にしていられない。

「私だって、セニョールだのムツシュだのって呼ばれていて、女の子扱いされてないっす!」

最後に、いつもの口調を出してしまったオオルリは大声でおもいっきり叫んだ。

それから、シエルがやけにスッキリとした表情をしているのに気づいたオオルリ。

『ちよつと遊びたかっただけスカ……』

シエルにとって、人にあだ名を付けるのは、相手をからかってやるくらいの意味しかないのだろう。

遊ばれたような感じである。

シエルが一美の事を見て、じつ……と何かを考え出した。

それで、あたりの空気が張り詰めていく。これは、さっきまでの一美とシエルの女の戦いの続きが始まった合図である。

シエルは、何と言うのか? どうせ、さっきまでの仕返して変んまあだなを付けるだけだというのが、オオルリには完全に分かる。

「お姑スーパーRXね」

とんでもなくダサく、とんでもなく嫌味の籠ったあだ名だ。

オオルリには、むしろこれは芸術的なくらいにかんじるほどであった。何もスキ無く相手への嫌味になる。

「お姑つてなんだ! 変な名前を付けるな!」

当然一美は怒る。

「その礼儀だの作法なのに対してうるさい所がまさにお姑よ!」

まあそうだろう、嫌味を込めてつくった名前だ。シエールの当然の答えである。

「うわぁ……ドヤ顔だ」

当一は暢気に言った。

それで、シエールと一美の二人は視線をくばせあつて角を付き合させた。

『どうだまいったか？』と言わんばかりにシエールが体をふんぞり返らせているのに、『それを、どう叩き落そうか？』と言わんばかりにトラのような目で睨む一美の姿。

「表に出てもらいましょう……」

隣にいたオオルリの背筋が凍るような冷たい声で一美が言った。

シエールは、無言で茶室から出て行き、それに続いて他のメンツも出て行った。

ししおどしの音がカコンと鳴った。

その、音が響く、一美の家の庭で、木刀を持ったシエールと、木でできたナギナタを持っている一美が睨み合っていた。

ドサクサにまぎれる形ではあるが、ラタからは離れる事ができたオオルリにとつては、ありがたい展開である。

「始まりました！　一美さんとシエールの戦い。女の意地をかけた頂上決戦です！」

シエールの仲間の一人が、マイクを持って勝手に実況をはじめている。

ケンカを止めに入ろうなんて、微塵だって考えていないようである。

『意外にまとまりがないっすね……』

仲間の問題に無関心。みんな思い思いの行動を始めており、団結性など皆無である。

オオルリとサナミが上手くいっていないように、このこの集団も、問題を抱えているようだ。

「人数ばかりを集めてもダメって事っすかね……？」

人数の事ばかりを集める事のみを考えていたのだが、自分の周りの仲間意識を高めていくのも、問題である。

「そうやね。仲間は大切だ。ちよっと手伝ってあげよ」

サナミが思念の会話で、オオルリに向けて言う。

「何をする気っすか？」

「目立たんようにやるからだいじよぶ」

サナミが今隠れている屋根の上から針が飛び、シエールの影に刺さった。

「まあ、有名な『忍術の影縫い』やね」

シエールの動きがそれでピタリと止まる。

一美は、シエールに向けてナギナタを突き出した。オオルリはこれで戦いが終わると思っていたが、シエールはすんでのところで反応をして、おもいつきり首を振った。

「バレた！」

「どうするんすか！」

これから、シエール側が、この事を言い出して、問題になっていくだろう。

そうオオルリは思っていた。だが、まったくシエール達の仲間は動かなかった。

オオルリはシエールの仲間達の様子をよく確認してみる。このバカ騒ぎを、他人事のように考えて、実況をしているノエリア。

ラタはこの事に気づいているのだからどうか分からない。無表情のまま立っているだけだ。

『あいつは、昔から表情が読めなくて、苦労したっス……』

ラタは、何かがあっても顔に出ない。ただのポーカーフェイスではなく、十分に相手の裏をかく頭脳が存在している。

彼女が、今だまっているのは、何かをたくらんでいるからではないか？ と、思うほどだ。

『ちよい待ち。もしかして、あれは寝てるんちゃう？』

サナミが交信で言ってきた。それで、よくよくラタの様子を確認してみる。

リーシアがラタのほほを引っ張ったり、揺さぶったりし始めた。

『あれで寝ていたようやね』

『目がガン空きなんスけど！ 怖っ瞬きしてないっス！』

そして、リーシアがラタの事を叩き起こすのだが、ラタはまた寝てしまう。

縁側まで歩いていき、体を横たえていった。

『ラタ……あれでもまた寝ようとしているっス！ あいつあんなに寝汚いんスか！』

口に出すことができないまでも、心の中で言うオオルリ。

そ野中でも、一美の援護のために、いくつもの武器が投げ込まれていく。クナイに手裏剣、果ては弓矢や取り縄までも投げ込まれていった。

『サナミ！ あなた隠す気はもうないっスね！』

『どうせ、何も言われん。とことんまでやればいいさね』

武器の砲火にさらされる中、シエールの仲間達は思い思いの行動

をとっている。誰も助けない。シエールに義理立てをする者がいる様子はない。

『あいつ……そんなに人望がないんスカね……』

彼女の仲間の中で、リーシアが動いた。隣にいた当一を、シエール達の中に投げ込んだのだ。

『なるほど……』

オオルリは、すぐにその意味に気づく。

もみ合って倒れた一美達だが、どうにもわざとらしく倒れているようにオオルリの目には見えた。

そして、口では、当一に『離れる』といているのだが、当一の事を掴んで放さず二人で競って抱きしめていたのだ。

あれから、一美はみんなに屋敷の案内を言うとって、全員を屋敷の中に連れ込んだ。

当一の隣で、ピリピリしているリーシアが、しきりにあたりを警戒していた。

『当一くん誰かが近づくと、また問題が起こるから、自分で護衛をしているって感じかね』

リーシアの様子は、サナミが言うとおりのようである。

「なぜか、二人の機嫌がいきなり良くなったな……」

当一はのん気に言った。災いの火種が、自分にある事がまるで分かっていない。これにはオオルリも呆れたものだ。

「なぜか……っていうか、理由は明白なただけだね」

リーシアが言う。リーシアもあきれながら言っていた。

「俺の事をブン投げた理由も明白にしておらおうか」

それをリーシアが聞くと、リーシアの顔がいきなり固まった。

そして、笑っているのか、怒りで引きつっているのか分からないような、恐ろしい表情になっていったのだ。

『切れたっス……』

リーシアの様子を見て、半分同情を感じながらも、オオルリは思

った。

「自分で気づかんか！」

リーシアがたまらずに大声で叫ぶと、ラタが周りを見回した。

「いえ……寝てませんよ」

「またあんた寝てたの！ 歩きながら寝るってどんな特技よ！」

シエールがそれを見て言った。

「あんた、騒ぐのはやめなさい。みっともないわよ」

それに続いて一美も言う。

「ギャーギャーと騒ぐのはやめろよ。野蛮だぞ」

「ついさっきまでチャンバラをやってた奴らに言われたくないわよ！」

シエールはため息を吐いた。

「何をそんなに興奮しているのよ。そんなに熱くなるようなことがあった？」

さっきまでの表情をしながら、そこでリーシアが固まった。オオルリの背筋にゾクリと悪寒が走るのを感じる。シエールに向けた視線なのだが、その表情を見ただけでオオルリがビクリと身を震わせた。

それからリーシアは、怒り狂って騒ぎ出す。だが、シエールも一美も、サラリと受け流していく。

リーシアの様子は、猿回しの猿が、いくら叫んでも相手にされずにいるような、哀れな様子であった。

シエール達が帰った後、オオルリは自分の部屋に戻って日記をつけ始めた。

座って書く机の上には、最低限の筆記具だけしか置かれていない。オオルリの内面を写すような質素な机だ。

どう書けばいいのか分からない。

他の参加者の実情を知りたいと思っていたのだが、知ってしまうと、他の参加者だってまともには無く、仲間意識も感じられない。

「書くことは決まったかん？」

その後ろからサナミが話しかけてきた。

「いつつも読ませてもらっているけど、まじめな事しか書いていなくてつまらないよ。だけど、今日はおもしろい事を書きそうやね」「勝手に読まないでくださいっスよ」

結局、今回の事では進む先などまったく見えてこなかった。自分がこの戦いで勝つために、何をすればいいか？　いまだに空白のままであった。

頭を抱えるオオルリにサナミが言う。

「明日書けばいいやん。無理をしても体を壊すだけやで」

サナミが言う事が真理のように感じられた。リーシアはあのまともりがない中で、必死になって、事態を収束させようとした。そして、結果として空回る姿を見せていた。

オオルリは思う。

確かに仲間を集めるのは大切だろう。だがそれよりも重要なのは無理なくやる事である。

いきなり一人でで張り切っても上手くいかない。理想が高すぎではリーシアのように疲れ切って壊れてしまうだろう。

無理をせず、じっくりと進む、進み続ければ先は必ず見えるはずなのだ。

「明日からがんばるっス」

オオルリは言った。

何か違うような気がする……

心の隅でそう思いながらも、オオルリは日記をつけるのを諦めて、もそもそと布団の中に潜っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3273s/>

茶室の裏側はこうなっていたっス

2011年4月12日23時10分発行